

# 故 山上武教授略歴ならびに著作目録

## 略 歴

昭和12年10月10日生

昭和37年 3 月 一橋大学商学部卒業

昭和39年 4 月 一橋大学大学院商学研究科修士課程入学

昭和41年 3 月 一橋大学大学院商学研究科修士課程修了

昭和42年 4 月 千葉商科大学専任講師

昭和43年 4 月 一橋大学大学院商学研究科博士過程入学

昭和46年 3 月 一橋大学大学院商学研究科博士過程修了

昭和47年 4 月 千葉商科大学助教授

昭和53年 4 月 千葉商科大学教授

昭和57年 3 月 千葉商科大学退職

昭和57年 4 月 学習院大学経済学部教授

平成10年11月 ご逝去

## 学会及び社会における活動等

日本会計研究学会

日本監査研究学会

日本原価計算研究学会

## 著作目録

著書・翻訳等の名称	単著・共著の別	発行年月	出版社・発行元
<b>【著書】</b>			
『やさしい簿記の実務：初心者にもすぐわかる』	単著	1975	永岡書店
『簿記論－入門と演習』－改訂版－	単著	1981.11	杉山書店
『会計学概説』	共著	1981.6	中央経済社
『会計学概説』－改訂版－	共著	1983.6	中央経済社
<b>【翻訳】</b>			
『物価変動財務報告』	共訳		同文館
<b>【論文】</b>			
「米国における証取監査発足までの事情」	単著	1967.11	千葉商大論集 8
「英国の剰余金の考え方－1－配当可能利益との関連を中心に」	単著	1968.11	千葉商大論集10
「投資分析と一般物価水準修正－テックマンの調査」	単著	1970.6	千葉商大論集13
「英国の資本準備全概念の史的考察－英国の剰余金の考え方－3, 4 完－」	単著	1970.12	千葉商大論集14
「英国の資本準備全概念の史的考察－英国の剰余金の考え方－3, 4 完－」	単著	1971.12	千葉商大論集16
「不動産開発事業の会計－カナダ公認会計士協会の研究」	単著	1973.8	企業会計25 (8)
「不動産開発事業の会計－カナダ公認会計士協会の研究」	単著	1973.1	千葉商大論集 (商経) 11 (2)
「不動産開発事業の会計－カナダ公認会計士協会の研究－続－」	単著	1974.2	千葉商大論集 (商経) 11 (3)
「英国におけるインフレーション会計の発足」	単著	1974.6	千葉商大論集 (商経) 12 (1)
「取替原価会計－レヴジンの理論」	単著	1974.12	千葉商大論集 (商経) 12 (3)
「公益事業における建設利息の会計－ポメラントの調査」	単著	1975.6	千葉商大論集 (商経) 13 (1)
「時下会計と物価水準修正－ローゼンの所論」	単著	1975.12	千葉商大論集 (商経) 13 (3)
カークマン「インフレーション会計」	単著	1976.3	千葉商大論集 (商経) 13 (4)
「B.Grimmsleyのインフレーション会計」	単著	1976.6	千葉商大論集 (商経) 14 (1)
「インフレーション会計の最近の動向について」	単著	1977.9	千葉商大論集 (商経) 15 (2)
カークマン「インフレーション会計－続－」	単著	1980.1	千葉商大論集 (商経) 18 (2)
「貨幣的損益の分割表示－BrooksとBuckmasterの所説」	単著	1982.3	千葉商大論集 (商経) 19 (4)
「監査と会計責任－1－ShererとKentの所説」	単著	1985.3	学習院大学経済論集21 (3)
「監査と会計責任－2－ShererとKentの所説」	単著	1986.3	学習院大学経済論集22 (3)
「監査と会計責任－3－ShererとKentの所説」	単著	1987.3	学習院大学経済論集23 (4)
「インフレーション修正課税方式」(Pointon,John,Spratley,Derek著)	訳・解説	1989.6	学習院大学経済論集26 (1)
「創造的会計の一例(オフバランス金融)－Jan Griffithsの所説」	単著	1992.7	学習院大学経済論集29 (2)
「訴訟における会計専門家証人－F.C.Dykemanの所説」	単著	1995.9	学習院大学経済論集32 (3)

## 山上 武教授を偲んで

経済学部長 今野 浩一郎

本号は、去る平成10年11月6日に逝去された学習院大学経済学部教授山上武先生から経済学部が受けた学恩に感謝するとともに、先生が残されたご功績を追悼、記念する目的で編集されました。

先生は昨年の夏ごろから体調を崩され、幾度か入退院を繰り返されていました。そうしたときでも、休講されている授業のことを心配され、できるだけ早く教壇に戻りたいという気持ちを強く持たれていました。教科書をこわきにかかえ、少し前かがみになりながら早足で教室に向かわれる先生の姿が思い出されます。

先生は、昭和46年に一橋大学大学院の商学研究科博士課程を修了され、千葉商科大学教授を経て、昭和57年4月、学習院大学経済学部に教授として赴任されました。以来、17年にわたり簿記、税務会計、会計監査、演習等の科目を担当され、会計分野の教育に力をそそがれました。山上先生の誠実な人柄と教育に対する姿勢を慕って、多くの学生が授業を受講し、優秀な人材として社会に巣立っていきました。研究の面では、長年、会計監査の研究に精力的に取り組まれ、「監査と会計責任」に関連する多くの論文を発表されています。

また学内行政の面では、数多くの委員を歴任され、経済学部にとどまらず大学の運営に広くたずさわっていただきました。面倒な委員でも、「僕でよかったら」と、笑顔で快く引き受けられていた姿が大変印象に残っています。学部長の斜め前のいつも決まって座られる席から、笑顔で議論を見守り広い視野から静かに発言される先生は、われわれにとって懐かしい教授会の風景になってしまいました。

いま経済学部は大きく変わろうとしています。こうしたときに、山上先生を失うということは残念でなりません。先生が残された多くのことを土台にして、新しい経済学部を作ることが、これまで先生から受けたご恩にこたえる道と命じて、努力していきたいと考えております。

本号をご霊前にささげ、こころより先生のご冥福をお祈りいたします。

## 山上先生の思い出

小山 明宏

平成10年11月7日（土）朝、自宅にいた私に共同研究室から電話が入った。受話器の向こうから「山上先生が……」という担当副手の声が聞こえたとき、私は彼女との前日の昼休みの会話を思いだした。それは、大学院経営学研究科の今年度の授業計画について、特に修士論文の審査委員の確認を教務部に出さねばならないということで、偶然、大学院経営学研究科委員長を拝命中の私が、担当副手から聞かれた件である。すなわち、9月から療養しておられた山上先生が、12月には復帰されて2つの修士論文の審査に、主査としてあたられることの確認であった。私は、

「もちろんです」と答え、お互いあいづちをうって、書類をまわすことにしたのであった。

受話器を握りながら、この件で何か教務部関係の手続きの不備があったかな、という意識が一瞬脳裏をかすめたその時、「山上先生が、お亡くなりになりました」という言葉が入ってきて、私はしばらくの間、何を聞いているのか全く脳にインプットされず、ぼかんとしていたのを今思い出すのである。それほど山上先生の死は突然であり、まさしく髪の毛の先っぽほども考えもしなかったことだった。

山上先生が本学にいらしたのは1982年4月である。前年3月に大学院を終えて、翌4月、本学に赴任した私にとって学習院での2年目の春、2人経営学科に着任されたうちのお一人が山上先生だった。経営財務担当の私にとっては、関連科目である会計学関係を当時担当しておられた久野、狩野両先生とともに、山上先生も大学の先輩であり、ご挨拶をさせていただいた。この時初めてお会いしてお話した、先生のイメージは、温和で物静かな方、というものであった。以来17年、経営学科の会計・財務部門での先輩あるいは同僚としての山上先生は、主としてイギリスにおける会計学説に興味を持たれ、この間1年間、イギリスに海外研修で滞在され、研究をされたのは、まだ記憶に新しいところである。山上先生は、ご自分の様々な成果をあまり他人にアピールされないタイプの方であった。そして、黙々と仕事に励み、会話に際してももっぱら聞き役で、あいづちをうったり、その後でゆっくりとご自分の考えをおっしゃる、ということが多かったように記憶している。

山上先生とは、御一緒に旅行したことがある。現在の教育研究棟（東2号館）ができる前、まだ東1号館に研究室があった頃、新しい教育研究棟を建てるための予備調査を行っていた頃である。全国各地の大学で、教育・研究で評判の良い建物を持っている、という大学を調べ、我々にも有意義な情報がないかどうか見学して歩こう、ということで、待ち合わせて新幹線で名古屋へ行ったのが、山上先生と私であった。当日体調が悪かった私は、山上先生にほとんどおまかせして、もっぱら後について歩いていた記憶がある。先生は、こういう時ははっきりしておられて、私の様子から、もうご自分がなさらないと進まないことをすぐに理解されて、聞き取りなどをやって下さったのである。

先生のこのような性格は、私たち年下の者にとっては、とても快いものであった。大変はっきりとしていて、任せる時には完全に任せる、というのが先生のポリシーである。その後、狩野先生の逝去にあたり行われた採用人事でも、現場の活動は任せられて、進行のチェックのみをしておられた。こうしてようやく会計学関係のスタッフが3人になった矢先での、山上先生の逝去は、何とも表現し得ない、残念なことである。

最後に先生とゆっくりお話したのは、1998年初夏、東2号館10階の1001号室、先生の研究室であったと記憶している。先生の研究室は、あまりモノを置かないというお考えもあってか、広々として、大変良く整頓されていて、清潔であった。東2号館が完成し、この部屋を選ぶにあたって、先生は大方が11階以上の部屋を希望し、競争が激しくなっているのを横目に、10階の南側の東端の部屋を指名されたのだった。このことを笑いながら私に詳しく話して下さった時の、あの、先生の表情は、普段なかなか見られない一面を見せて下さったものとして、深く記憶に残っている。そしてあの1998年初夏の、先生の研究室での会話、新宿方向から斜めに差し込む午後光の中でお話した、山上先生のお姿を、もう私たちは見ることができなくなってしまった。

山上 武先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

## 山上教授の訃音に接して

謹んで山上 武教授のご冥福を祈り上げます

成城大学経済学部教授 白鳥 庄之助

山上教授は私よりやや年少ですが、ほぼ同世代に属し、共に一橋大学において片野一郎先生のゼミナールで会計学を学んだ同門の間柄です。また、山上教授のお住まいは千葉県佐倉市の県立佐倉高校のすぐ前にあり、この高校は私の母校でもあって、拙宅から30分とはかかりません。そのようなわけで、私たちの間にはもっと頻繁な行き来があり、私が山上教授のお人柄や学風を熟知しているのが当然なのかもしれませんが、今にして思えば心遣いなことに、お互い仕事に追われ、また、会いたいときには何時でも会えるで行った気軽さも手伝って、私たちの日常の交流は稀薄であり、山上教授が具体的にどんな問題に取り組んでおられたのか、殆ど存じ上げていなかったというのが実状です。

それでも、山上教授の学風の一端に触れる貴重な機会が何度かありました。その一つは、日本会計研究学会に片野先生を委員長としてインフレーション会計特別委員会が組織され、錚々たる先生方のお仲間へ山上教授や私を加えていただいた折りのことです。この研究会は足かけ3年間に亘って続けられ、時に合宿して討論するなど、密度の高い共同研究の場でした。この研究会の席上、山上教授はご自分の意見を積極的に開陳することは極力控え、むしろ、他の人々の意見に耳を傾けて、それをご自分の中でじっくり熟成させるという態度を堅持されていたように思います。私如き若輩が、スマートに洗練された論理のつもりで、その実は軽薄な意見を述べたときにも、山上教授はそれをじっと聴いて下さいました。しかし、その折、私は、教授の真剣な眼差しに、「そんなに簡単な問題ではないだろう」とか、「そんなやり方で大丈夫なのか」といった問題提起をいつも怖いほど感じておりました。

山上教授は教職に就かれる前、公認会計士として会計実務に携わっておられましたが、実務の世界には、教室・研究室・書斎からみただけでは思いもつかぬような問題が沢山あるのでしょう。教授は、ある時、私との茶飲み話の席で、監査人と被監査会社の担当職員との間に何時しか人間的な交流が芽生え、お互い心を開くようになると、監査マニュアルに従っただけの通り一遍の監査手続きでは分からなかったことも見えてくることもあるけれど、実は、そこから先の職業的判断が難しいんだ、といわれたことがありました。山上教授の学風に窺われる懐の深さには、若き日の実務経験が大いに寄与していたのではなかったかと思われまます。また、教授は別の機会に、イギリスの会計に関心と畏敬の念を持っている、とふと漏らされたことがありました。長い歴史を持つ実務にしっかりと根を下ろした堅実なイギリス会計学を思い、私は、さもありません、いかにも山上教授らしいなと納得したものでした。

私たちの間では日常的な交流こそ稀薄でしたが、山上教授は終生、私にとってきわめて身近に感じられる、そして手強い存在であり続けました。

最後にもう一度、心からなる哀悼の意をこめて、山上さん、どうぞ天国で安らかにお休み下さい。

## 山上先生を悼む

久野 秀男

「〈年命はまさに朝露の如し〉と申しますが、古稀に達した小生が、未だ六十路も半ばの先生に先立たれるとは、夢想だにできなかったことです」

これは、「学習院大学・経済論集」：第31巻・第3号〈故 狩野 勇教授追悼号〉（1994年10月）に寄せた小生の追悼文の一節であり、山上教授も同誌に「狩野先生を偲んで」を寄稿しておられます。

久野・狩野教授・山上教授は、同学・同窓であり、山上教授の場合は、加えて同門の後輩でもありました。また、経済学部との関わりでいえば、政経学部から法学部と経済学部とに分離する直前に赴任したのが小生であり、経済学部の充実を目途として期待され赴任されたのが狩野教授であり、新設経営学科の有力教授として赴任されたのが山上教授でありました。

爾来数十年、「財務会計」（久野）・「管理会計」（狩野）・「制度実践会計」（山上）のそれぞれの専攻分野で、切磋・琢磨してまいりました。

「財務会計」の分野は、内外にわたる史的研究の領域を除いては、殆ど「古典会計学」とみられている現状に比べて、「管理会計」並びに「制度実践会計」の領域では、とくに学際的分野における画期的な将来性とその発展とが、内外共に期待されている現況にあります。

両教授は、ともにそれぞれの新分野を目指して、精力的・意欲的に研究を継続されましたから、極めて先見性に富んだ数々の研究業績を挙げてこられましたし、極く近い将来には、さらなる画期的な研究業績を挙げるのが期待されておりました。

天、かすに時を以てせず、山上教授は、六十路を越えることわずかに一年で急逝されました。誠に誠に痛恨の極みであります。

ここに謹んでご冥福をお祈り致しますとともに、併せて、ご生前の輝かしい研究業績に対して衷心より敬意を表す次第であります。

## 山上先生を偲んで

湯沢 威

私の知る限り、経済学部が現役教員を失ったのは、1994年の狩野先生に続きお二人目である。しかも皮肉なことに、お二人とも会計学関係の先生であった。本学部にとって貴重な人材を再び失うことになってしまった。

山上先生は昭和57年に前任校の千葉商科大学から本学に赴任されたが、その時仲介の労を執られたのが現名誉教授の久野秀男先生であった。したがって、山上先生が本学に赴任する前にはある程度先生に関する情報は伺っていた。久野先生は、山上先生について手堅い学問的業績に加え、

人柄の良さを強調されていたが、直接ご本人に接した印象はまさに評判通りの方であった。常に謙譲の美德を旨とされ、派手に振る舞うことは全くなかった。さまざまな会議での山上先生の発言は決して多くはないが、しかし議論のポイントになるところでは自分の意見を披露され、筋を通された。無駄なことを出来るだけ避け、簡素を旨とするところは、先生の人柄であった。それは例えば研究室を見れば一目瞭然である。私の研究室などは足の踏み場もないほど乱雑であり、思考の混乱がそのまま研究室の整頓状況に現れているが、山上先生の研究室は全く無駄がなく、整理が実に良く行き届いている。会計学と歴史学との学問的差がそうさせていると、弁解したい気もするが、所詮、整理整頓の能力の差、思考回路の違いといわざるを得ない。歴史研究者の研究室でも見事に整理整頓されている研究室を訪れたことがあるからである。

山上先生は酒・たばこをたしまれたが、健康にはことのほか注意をされていたように思われる。外見から拝見しても、中年太りなどとは無縁の体型であった。日頃何事にも細かいところに気を使われ、慎重に振る舞っておられた。先生は極めて几帳面に判断され、一つ一つを確実に処理されるタイプである。したがって、酒・たばこについても健康上どのような限界があるか全て計算済みで嗜んでおられたものと思う。したがって、この度のご病気は全くの計測不能の出来事であったに違いない。

山上先生は人生設計に当たっても極めて計画的であったと思われる。先生は1990年9月から1年間オックスフォードに留学され、1999年度に再度海外留学を予定されていた。しかし、この計画は実に2年前から計画され、私もいろいろ相談に与った。最初はニュージーランドに半年、それからイギリスへ半年と留学を希望され、いろいろ研究計画を練っておられた。オックスフォード留学の時はご家族とご一緒に滞在され、今回もご家族といろいろ相談されて、留学先を決定されたと同っていた。私も微力ながら、1998年の夏、渡英のおり、受入先大学と交渉をし、その可能性を先生に伝えたいと思って、帰国したら、すでに入院中とお話であった。2度目の留学でさらに研究成果をあげることを心待ちにされていたことを思うと残念でならない。今となっては、ただご冥福を祈るのみである。

(平成11年2月15日)

## 山上先生を偲んで

米山 正樹

私が山上先生と最初にお会いしたのは、平成6年の初夏、久野秀男先生の後任候補として、私がここ学習院を訪れたときのことでした。ご退職予定の久野先生が人事委員会から外れていたため、山上先生は委員会の中で、唯一の会計専門家でいらっしゃいました。にもかかわらず、万事に控えめで、ほかの先生方が私に質問されるのを微笑みながら聞いておられるばかりでした。新宅先生(当時)に促され、最後によりやく重い腰をあげられましたが、質問する側が恐縮していらっしゃるの、受け答える側の私はどう対応すればよいのかわからず、当惑してしまった記憶が残っています。

以来、山上先生からは4年あまり公私にわたりご指導を賜ることとなりましたが、控えめな印象は最後まで変わることがありませんでした。本学の会計スタッフは、教育者・研究者として大先輩にあたる山上先生のほか、「駆け出しのひよっこ」三矢さんと私という、ある意味でいびつな年齢構成となっています。山上先生としては、恐れを知らない私どもに対し、言いたいことも多々あったことと察します。しかし山上先生が私どもに対し先輩風を吹かせるようなことは一度としてなく、無鉄砲な私どもの振る舞いを常に暖かく見守って下さいました。そういう山上先生のお心遣いに生前報いることができず、いまはただ後悔するばかりです。

私が生前の山上先生と最後にお会いしたのは、昨年10月はじめのことでした。末永副手・石神副手とともに佐倉の病院までお見舞いに行ったときの山上先生は、それからわずか1ヶ月後に急逝されるとは想像できないほどお元気でした。髭を生やされたためお顔の印象は変わっていましたが、何よりも闘病のための気力がみなぎっており、翌年に予定されていた研究休暇を楽しみにしていらっしやいました。ゆっくり時間をかけてご静養なされば、また私どもをご指導下さるはず、と確信して病院を後にしただけに、訃報を聞いたときの衝撃は言葉に表せないほどのものでした。

若手ふたりだけが残された現状に不安を覚えるたび、山上先生の存在が私どもにとっていかに大きいものであったのかを痛感します。久野先生・狩野先生・そして山上先生が培ってこられた、本学会計スタッフに対する評価を維持し高めることこそ、いま私が山上先生にできる最大の恩返しであろうと確信しています。山上先生は余人を以て代え難く、その穴を埋めることについて心配は尽きませんが、この難事に際しても前向きに対処していこうと思います。

最後になりましたが、山上先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げるとともに、生前のご指導・ご鞭撻に改めて感謝の意を表します。